木漏れ日の中で実感する幸せなひととき

山口県周南市　「鹿野の風」プロジェクト

わくわく
ガーデ

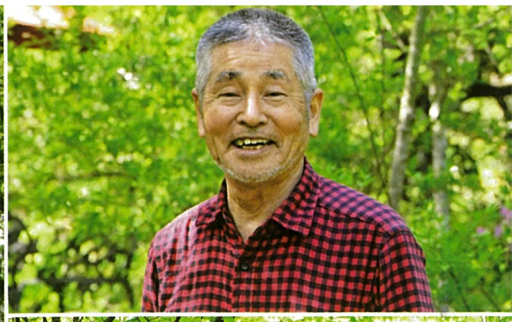
山口県周南市の鹿野地域は中国山地の西端にある高原のまち。錦帯橋を流れる錦川の源流が集落を潤し、赤瓦の民家と新緑のコントラストが美しい。鹿野には山口県屈指の名刹「漢陽寺」など古くからの寺社が多く、中でも「おみくじ」発祥の地として知られる二所山田神社は、明治期に宮司が女性の自立を提唱し機関誌「女子道」を創刊。その資金源としておみくじの製造を開始したという歴史があり、現在も国内のおみくじの6割以上がこの地で製作されている。

鹿野の里山が最も輝く春、「里山オープンガーデンかの」を訪れた。「鹿野の風」プロジェクト（代表・福田清治さん）の主催により鹿野の民家やカフェ、神社仏閣、企業など25か所のガーデンが参加し一般に開放する取り組みで、4月から5月末までの2か月に渡り開かれ今年で4回目の開催となる。

はじめに訪れたのは山裾の古民家の跡地に広がる「わくわくガーデン」。この土地のオーナーの田中さんは、子どもたちの自然体験の場や、車いすの人でも楽しめるガーデンを作りたいという夢を持っていたが、庭造りや園芸の経験がなかった。そんな折、福田さんとの出会いから、自由参加で集まった参加者とイメージを共有しながら、みんなで素敵なガーデン作りに取り組む「わくわくガーデン」を始めることに。この日は、山野草の植栽、ピザ窯の製作、蔵や敷地の整備などを行った。棚田づくりの経験があるメンバーもおり、重い石を掘り返すのも手慣れた様子だ。

10時になると、白樺の木漏れ日の下から、チェロ・コントラバス・バイオリンの演奏家3人が奏でる音色が流れ、作業の手を休めたメンバーはベンチに腰掛け耳を澄ませる。オープンガーデンの期間中は鹿野の何処かで不定期に生演奏が行われ、贅沢な時間を過ごすことができる。

その後、代表の福田さんが開く「旧マルタガーデン」を訪れる。



福田さんは手作りのログハウスの自宅で4年前までカフェを営んでいた。錦川を一望できるオープンテラスと、珍しい野草がたくさん咲いたガーデンに癒される。「来場された方には、この地に自然と咲く山野草の素朴な魅力を感じてほしい」と思いを込める。

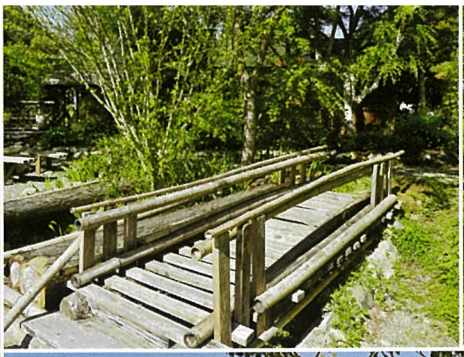
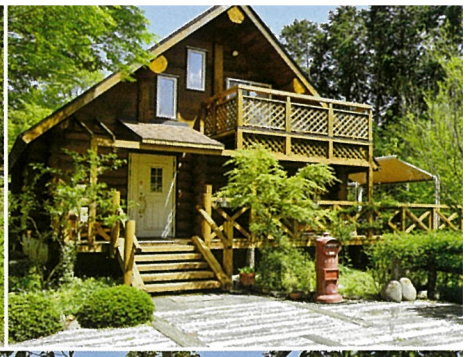
また、副代表の寺戸さんが開く「たぬきの庭」を訪れる。娘さんが営むパン屋さんがあり、雑木と草花の庭が広がる。寺戸さんは「庭の中で少し咲いてくる山野草がかわいい」と手がけた庭に目を細める。ありのままの自然の状態を大切に、山椒、アブラギリ、アザミ、ポポなど実に多様な草花が生えている。

鹿野の人口減少は著しい。最盛期の９０００人から現在では２８００人を切り、10年後には２０００人になると言われている。地域が衰退し鹿野の美しい里山が失われてしまう。こんな状況を打開しようと平成23年に「鹿野の風」プロジェクトは立ち上がった。

山間部にある鹿野には高速道路が通り、広島や福岡から車で1時間ほどの距離。福田さんは「今の生活に疲れたら、半日だけでも鹿野に来て、何もしないで佇んでいるだけいい。鹿野の自然を五感で感じてもらい、日常との切り替えをしてもらう場になればいい」と話す。鹿野でしかできない「木漏れ日計画」のもと活動をスタートさせる。

街中に雑木を植える活動ではこれまでに98本を植樹。木漏れ日ベンチ１００脚の設置計画ではこれまで45脚を設置。４年前からは花と緑の力を借りて地域の魅力を発信しようと、里山オープンガーデンの開催を続けている。さらに2年前からは、若い世代を中心に考案した「隠れ家マルシェ」を毎月開催し、１０００人以上の来場者のみならず、将来のカフェ起業を目指す人材が鹿野に来るようになっている。

年間を通じて、人・物・金・情報が循環し続ける仕組みをつくり、

「鹿野に行きたい、関わりたい、住んでみたい」交流人口と関係人口を増やしたいと願う同会の取り組みは成果をあげつつある。

福田さんは自らの経験も活かして、鹿野を「日本一のカフェの里」にする構想を持っている。カフェの数だけ来客があり、農作物やコメが消費される。空き家を活用した起業から移住につながる可能性もある。その中核になる存在として、同会では、鹿野総合支所跡地に「木漏れ日の森とカフェ」建設を行政に提案しているところだ。

翌日、鹿野のシンボルともいえる「山野草のエキ」を訪れた。ここは故伊藤芳高さんが28000㎡の山を17年の歳月をかけて一人で整備し、350種類の山野草を地道に植栽してきた生きた図鑑の森だ。保存会のボランティアにより保護されている森を歩くと、一つ一つの山野草に案内看板があり、山野草のエキに賛同する多くの企業から助成金が寄せられている。貴重な山野草の花が気軽にみられる森としてリピーターが多い。

今回の取材の最後に訪れた「山田ガーデン」は、高台の端にあり見晴らしが抜群に良い。家主の山田さんが自宅前の崖地を購入し大木を伐採したところ、絶景の地となった。先日は来場した若いカップルと話してみると実は4年前からのリピーターだという。「自分の庭のファンになってくれている人がいて嬉しくなった。いつまでも続けたい」と山田さんは話す。

ふと頭上を見上げると、高台を吹き抜ける風にたなびく鯉のぼり。鹿野を巡った2日間、一人一人が希望を持てるまちへと新しい風が吹いていることを実感した。

【連絡先】
「鹿野の風」プロジェクト（代表・福田清治さん）
メール：maruta@m2.ccsnet.ne.jp